

## P10-186

手術後、生命の危機状態からICUで死を迎えた患者・家族への看護

名古屋第一赤十字病院 看護部

○平松 円、長尾 優紀、西 幸子

ICUでは一般病棟と比較すると生命の危機に侵されている患者が入室していることが多い。また、患者家族にとっても同様で、身内である家族が生命の危機に侵されているという現実を目の当たりにして、精神的ショックは大きく、家族も危機状態に陥っているといわれている。

私たちは、日頃から危機状態にある患者とその家族に看護介入することの難しさを感じながら、そのつど、その患者・家族に看護介入しているのが現状である。どのように看護介入をすれば患者・家族を支えることができるのか、いつも課題が解決されないでいる。

今回の症例は、肝切除術21日目に出血性ショックでICUに入室し、人工呼吸管理、血液浄化療法、多剤薬剤使用などの集中治療を15日間行ったが、救命できず死を迎えた患者である。家族の面会は毎日あり、医師は病態を中心にICを行った、限られた面会時間に家族も医師のIC時にはメモを取るなど積極的な姿勢が見られた。また、患者のモニターの数値やバイタルサインなども観察し、看護師に質問することもあった。しかし、今後の予測される経過や、治療方針について家族は専門的な知識は持ち合わせず、看護師も適切な説明ができないまま、ターミナル期から死を迎えてしまい、また課題を残してしまっただけ。

私たちはICU入室中の、生命の危機状態にある患者・家族に適切な看護介入をしたいと考え、文献検索を行った、その結果学びを得たので、ここに報告する。

## P10-188

不安定な1型糖尿病で妻の死後鬱状態にある独居老人の在宅を可能にした一事例

嘉麻赤十字病院 看護部

○後藤 利子、大庭 亜子、渡辺 恵子

【はじめに】妻の死により抑鬱傾向となり糖尿病（以後DMと略す）が悪化した利用者が、社会資源を利用し、精神的安定を得てDM治療に対しても前向きな姿勢を取り戻したケースを経験したので報告する。

【目的】疾病を持つ独居老人男性の在宅生活を可能にする要因を明らかにし、今後の自立支援サービスにつなげる。

【方法】研究機関：H20年6月3日～H21年10月31日

年齢：性別 68歳 男性（以下M氏とする）

病名：1型DM、末梢神経障害

家族構成：独居

介護サービス：訪問看護 週1回・訪問介護 週2回

【倫理的配慮】本人に承諾を得た。

【結果】1) 食事は惣菜が主で表1に偏っていた。調理援助でヘルパー利用を開始。食品1単位の目安写真を貼るなど指導後はバランスよく食材を購入出来るようになった。

2) 妻の死に悲嘆激しく自殺企図もあったが、思いを十分に吐露できるよう関わることで妻の死を受容する言葉も聞かれるようになり、精神的安定を取り戻していった。

3) 食前に運動を行って低血糖を起こしていたためブドウ糖を携帯し食後に行なうよう指導した。

4) 介入前HbA1c7.3～8.6%、介入後6.5%前後で経過。

【考察】傾聴と共感により心情を吐露できる関係を築けた事は、精神的支援になったと考える。食事指導とヘルパーの調理援助は食生活の改善につながった。早期の社会資源の導入は生活や治療行動を支える事になった。M氏の行動と努力に注目し肯定的に関わった事は、自分を大切にしたい気持ちの芽生えとセルフケア行動の促進につながった。

【結論】1) 精神的支援と肯定的関りは行動変容を促した。

2) ヘルパーによる調理支援は独居老人男性の治療や生活を支える要因となる。

3) 介護サービスの適切な利用がM氏の在宅生活を可能にした。

## P10-187

産科領域における終末期看護 一死産後、再起へと歩んでいる一事例一

日本赤十字社和歌山医療センター 看護部

○大又 裕美

【目的・方法】当センターでは、年間30例前後の死産（人工死産を含む）を取り扱い、そのケアを産科領域における終末期看護（妊娠・産褥期において対象となる人々が児の死を受け入れていく期間）と捉え、褥婦や家族に寄り添い、希望を取り入れたケアを事例に応じて行っています。その中の一例である妊娠17週にて児が無脳症であると診断を受けた事例の心理的経過と関わりをご紹介します。

【経過】本事例は、診断に対し人工死産を選択、4日後入院となりました。入院時、現実への悲しみ深い中、分娩期における希望を提示しながらも自己の中で解消できない怒りを秘めているような印象がありました。私たちは、その状況と希望をスタッフ間で共有すると共に、できる限りその希望に添いながら分娩期が送れるよう計画、その中で児へのメッセージを提案、死産後は、褥婦と共に病棟で用意した小さな赤ちゃんのための服を用い児のケアを行いました。また、児と同室にて時を過ごせるように配慮しました。関わりをもつ中で褥婦の表情は少しずつ和らぎ、児の死を受容し、自ら児のために帽子や布団を作るなど適応へと移行していくことが感じられました。2ヵ月後、褥婦から手紙と小さな赤ちゃんのための服が送られてきました。手紙には、私たちの関わりで気持ちが助けられたこと、また自分も同じ経験をした人のために役にたたいことが綴られ、再起へと歩んでいる様子を知りました。その5ヵ月後、小さな赤ちゃんのための服と共にサイトを立ち上げたという報告を頂いています。

【結論】3日間という短い入院期間でしたが、事例に寄り添い関わりました。それは、事例の歩み・再起へと繋がっています。また児を想起できる場所と関わりは継続しています。

## P10-189

看護職員の対応に対する入院患者満足度調査

盛岡赤十字病院 看護部業務委員会

○稲葉 弘子、木下 香代子、瀧澤 美子、伊藤 敏子、菅沼 房江、松葉 真紀子、樋口 恵、小林 優子、中村 ゆかり、高橋 淑子、高橋 美智、菖蒲澤 幸子

【目的】看護師の対応に関連する項目で、「入院患者満足度調査」を行った。2008年と2009年の2年間の比較から、さらに、患者の満足度を高めるための課題を明らかにする。

【方法】調査は自記式質問紙、病棟単位留置き法で行った。

1. 調査期間：2008年7月1日～9月30日 2009年8月1日～10月31日

2. 調査対象：調査期間中に退院した患者あるいは家族

3. 調査内容：1) 基本属性：記入者が本人か家族か、性別、年代、入院期間 2) 満足度を問う項目：(1) 言葉使いや対応 (2) 信頼感・親しみ (3) 服装や髪型 (4) 頼んだこと、苦情への対応

(5) ナースコール後の時間 (6) 声をかけやすい雰囲気 (7) 説明は統一されていたか (8) 採血・検査の際の説明 (9) 本日受け持ちの挨拶 (10) 1日の予定の説明 (11) 受け持ち看護師としての自己紹介 (12) 看護計画についての説明 (13) 退院後の説明

(14) 安心感 (15) 今回の入院中に受けた看護には満足したか 満足度を問う項目については、それぞれの項目ごとに、満足～不満の4段階尺度を用いた。

4. 分析方法：データ分析には、Microsoft ExcelおよびSPSS Ver16.0を使用した。

【結果】8つの病棟から、2008年528人、2009年628人の回答を得た。看護師の「服装髪形」「言葉使いや対応」「信頼感・親しみ」は、2008年、2009年ともに満足度の平均が3.83以上と、看護師の接遇に関する満足度は高かった。「本日受け持ちの挨拶」は満足度平均3.66→3.79「1日の予定の説明」3.49→3.54「受け持ち看護師としての自己紹介」は3.52→3.64と上昇しており、固定チームナーシングの基本的項目の実践が評価された。しかし「看護計画についての説明」の満足度は3.69→3.68であり、看護師の観察ケアの実践の根拠を患者に説明することが課題である。